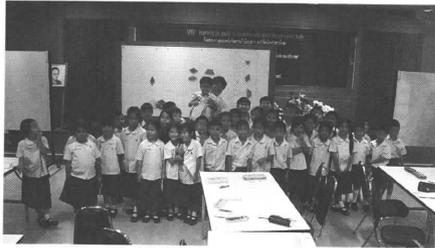


公開授業① 1年「かたち」

田中 博史



1. 1年生と通訳を介した公開授業を行ってみて

さて、早速タイの大会の公開授業。トップバッターはこの大会を企画した本人がやれということで私。3年前、シカゴでアメリカの子どもたちとの英語を使った授業を経験してはいるものの、英語ならまだしも、タイ語はまったくわからない。やはり緊張する。

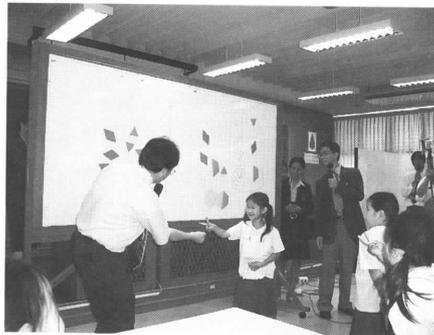
それにしても言葉がまったく自分で聞き取れないというのはつらいもので、子どもの「つぶやき」を授業展開のきっかけとしていくことが信条の私にとっては、最大の武器を取り上げられたようなもの。さてどうしたものか。ここは具体物を使って展開していくしかないと考え、パターンブロックを活用した授業を提案。授業の中で懸命に私に何かを訴えていた子どもがいた。この言葉を聞き取りたいと何度も思ったものである。これは後からわかったことだが、通訳のマイトリ先生は、我々にわかりやすくするために、子どもの言葉をかなり意識して伝えていたらしい。このあたりも実は授業観の違いが鮮明に出ているかもしれない。私たちは、子どもの拙い

ままの表現を洗練させていくことを授業の中心に置いているからである。

2. 本時の授業について

私が行ったのは、パターンブロックを使った日本でもお馴染みの授業。まず正六角形のブロックを2つずつ子どもたちに渡す。ジャンケンで正三角形、ひし形、台形のブロックを取りあうゲームを行う。約束はグーで勝ったら正三角形、チョキで勝ったらひし形、パーで勝ったら台形のブロックをもらえるというもの。取ったブロックは正六角形のお皿の上に並べていき、お皿がいっぱいになったら勝ちである。(ここが日本でやっているときと少し変えたところ。)

ジャンケンで互いに取り合っていくうちに、もしも約束のブロックが足りなくなったらどうするか考えさせる中で、図形の相互関係を発見させていくのが目的である。ひし形は正三角形2枚で作れるし、台形なら3枚だ。



NHKの「かんじるさんすう1・2・3」でも公開しているから参考にしてもらいたい。ちなみにこのブロック取りでジャンケンを活用し、その種類を変えて取っていくことでトラブルを生むというアイデアは、その昔、高橋昭彦氏が日本にパターンブロックを紹介したときに私が氏に提案したものだ。

授業は、言葉がわからなくて苦労したものの、実は子どもの身振り手振りからわかることもたくさんあった。例えば、ひし形のブロックが足りなくなったときがそうだった。一人の女の子がなにやら指を動かして友達に説明しているのを見つけた。瞬間にその子をとらえて、みんなに紹介した。このあたりは日本の子どものときとまったく同じ。算数で育てたい表現力として、数や式などの記号を使う力、言葉を使う力などがあるが、これに操作で表現する力というものもある。まさしく、言葉のない操作だけで交流できた瞬間だった。

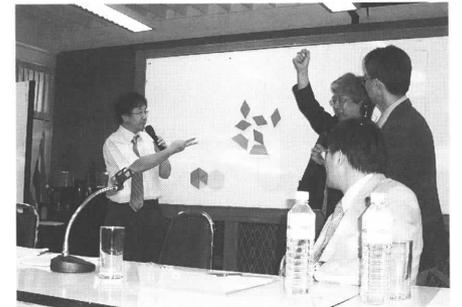
それにしてもかわいいタイの一年生の子どもたち。じゃんけんゲームを始めると、みんな自分がやりたいといって、いつの間にか多



くの子どもが黒板の前に集まってきた。このあたりも日本の子どもとまったく同じ。算数だからこそできる、異国の子どもたちとの言葉を頼らない交流の時間。私にとっても思い出に残る楽しい一時間となった。

3. こんな協議会はできない

下の写真は協議会のときの坪田氏と私が代案で対決しているところである。激しい討論で会場の先生まで巻き込んだ話し合いとなった。



会場の先生からは、「こんな率直な話し合いは私たちには、とてもできない。大いに学んでいきたい」という感想。熱く語っていたタイの先生が印象に残った。



